

武士、文化と芸術：前田家の権力と富

前田家の富と支援のもと、芸術、料理、建築、そして文化が栄えた。前田家は、1583 年から 1869 年まで現在の石川県を統治していた藩主だ。前田家の遺産は、建築、庭園、工芸、そして石川県の食と切っても切れない。

強力な加賀藩

近代日本は、自治体に当たる 250 以上の「藩」に分けられ、根本的には（現在の東京）江戸の将軍によって統治されていた。ほぼ現在の石川県と富山県に位置した加賀藩は、1583 年から将軍による封建制度が廃止になる明治時代（1868–1912）の初めまで、前田家の 14 代の藩主たちによって統治されていた。江戸から遠く離れていたにも関わらず、加賀藩は、最も富裕な藩であり、藩主たちも将軍のなかで最も高級クラスの大名だった。

各藩の富は、藩で収穫できる米（と他の穀物）の量によって決定されていた。その価値は、「石」という精白されていない玄米の単位で表現された。1 石は、約 180 リットルに相当する。加賀藩の 100 万「石」もの生産高は、他のどの藩よりも多かった。このランクは、「百万石」という誇りを表す言葉となり、石川県ではいまだによく使われ、特に高級料理や高級工芸品を形容するときに見られる。毎年 6 月に開催される大規模な百万石祭は、初代加賀藩主・前田利家（1537–1599）の金沢城到着を祝う。

金沢城は、藩都・金沢の中心にあった。前田家は、家来をみな金沢に住ませた。これは、市のおよそ 70%を武家の所有地が占めたことを意味する。長町を含む近隣の武士の地区のいくつかは、江戸時代（1603-1867）の雰囲気を残している。

前田家は、八つの重要な家来一族を抱えていた。これらの家来は、「加賀八家」として知られている。彼らは、実のところ、他の藩の藩主よりも裕福だった。広大な領地を所有し、自身の家臣を抱えていた。彼らの保有地は広大だったため、支配下の地域は、まるで金沢という大きな城下町の、さらにその内に第二の城下町があるかのようなだった。加賀本多博物館では、このような一族の権力がわかる。この博物館は、前田家の家臣のなかで最も裕福だった本多家の甲冑や武器、旗と他の美術工芸品を展示している。

加賀藩が治める金沢の外側の地域に住むほとんどは、農民と百姓たちだった。米は、最も一般的な穀物だった。塩の収穫は、能登半島で重要な産業だった。

保存状態のよい遺産

前田家は富を素晴らしい建築物の建設事業に使っていた。石川県は、この地で起きた戦争や自然災害による損害をほとんど免れたため、加賀藩の物理的な遺産の多くは、比較的当時と変わらず残っている。前田家によって造られた、完全な状態の庭園、別荘や寺を見れば、彼らの支援のもと、芸術と文化が洗練されていったことがわかる。

兼六園は、日本で最も有名な伝統的な庭園の一つだ。この庭園は、多くの景観要素を活かし調和させていることで知られている。この庭園は、17世紀に前田家が金沢城の城門の外側に造らせた、前身となる最も小さな庭から展開した。後続の世代がその庭を拡張し、修復したことで、1800年代半ばには、現在の広さにまでなったのだ。城門の内側では、領主たちは、玉泉院丸庭園をより私的な静養所とした。どちらの庭園も、現在は一般公開されている。

成巽閣は、兼六園の隣にある広大な別荘で、1863年に前田斉秦（1811-1844）が母の隠居所として建築した。この別荘は、日本の美に西洋の要素を融合したデザインになっている。当時人気のあった色彩豊かな透かし細工の彫刻、絵が描かれたつuitate、明るい色で塗られた内壁、そしてオランダ製のステンドグラスなど、高級な内装デザイン品で埋め尽くされている。

前田家は、金沢だけでなく、領土の各地に建てられた多くの建築物を所有していた。3代前田家統主・前田利常（1594-1658）は、小松市（加賀地域）にある、那谷寺の切立った崖のそばに、住居と庭園を造った。彼はまた、母を讃えて、羽咋（能登半島）の妙成寺に多くの建築物を造らせた。

芸術と文化の繁栄

加賀藩の富と前田家の芸術への支援は、石川県の芸術文化を繁栄させた。前田家は、彼らの富が將軍統治への脅威とみなされぬように、細心の注意を払っていた。そのため、故意に所有する多くの資源を文化的な発展のために充てるよう指示していた。藩主たちは日本でトップクラスの熟練職人たちを招き、金沢に住まわせ、惜しみなく俸給を与えた。

前田家からの支援と投資のおかげで、加賀友禅と加賀友禅の製品、そして金箔を使用した製品といった、石川県の最も有名な工芸が発展した。藩主による茶道の推進は、大樋焼の製造へと導いた。大樋焼とは、大樋家の後継者によってのみ造られる、極めて貴重な茶器である。

領主たちは、能舞台の目利きでもあった。そして、加賀藩は、日本国内でも、裕福な藩主の家臣だけでなく、一般市民もが能楽を学ぶことを推奨していた、数少ない場所の一つだった。能は、労働者たちの間でも人気だったため、金沢は「能が天国から降ってきた」と言われていた場所だ。それは、大工たちが屋根の上で作業するときに唱えていたことからわかる。金沢能楽美術館では、能楽についてより詳しく知ることができる。また、石川県の能楽堂での公演を観るとよい。

前田家は、おもてなしの文化を支援し、茶道を通して育んだことが、「加賀料理」と呼ばれる石川県の料理の発展につながった。藩主たちは、地域のトップ料理人たちに、上質な食材の入手を認め、腕を磨くことを促した。